

## 1.1 研究の背景

地方部での進学受け入れ先の不足や学歴重視の風潮により、大学進学を契機にして地方部の都道府県から都市部の大学に進学する高卒者は全国に多数存在し、平成 25 年学校基本調査によると、全国平均にして約半数が県外の大学に進学することが分かっている。さらに大学所在地近辺で就職先を選ぶ大学生も必然的に多数存在する。すると、地方部で県や市の補助金などにより小学校、中学校などの教育機関で学業を修めたにも関わらず、県外で就職してしまうことになり、地方部の県や市は大きな経済的損失を被っているとも考えることができる。このように、都市部で就職する学生が多いことから、大都市近郊の大学の方が就職に有利とされている傾向があるが、一方で、少子化による受験者数減(ピーク時の 6 割)、保護者の所得減少、若者の安全志向が相まって、大学選択にて地元重視、国公立重視の高校生が増えたとの指摘も増えてきている。医学系の地域枠も含め「地元志向」は高齢化が進行する地域での振興には貢献できるが、切磋琢磨などグローバル教育の視点からは逆行している。大学進学における居住地は、その後の就職先・定住先にも大きな影響を与えると考えられる。以上のような観点から、都道府県や大学においてどのような進学実態があるのかということに興味を持ち、視覚的に大学入学の「地元志向」に関して分析することはできないかと考え本研究にいたった。

## 1.2 分析と結果

本研究では、都道府県ごとの大学入学に際する人口移動を重力モデルで分析し、その後、都道府県ごとに学生を確保する原動力ともなっている大学について分析している。

重力モデルについて、人口規模を  $P$ 、移動人数を  $I$ 、都市間距離を  $d$  と置いた時、移動人数は 2 都市の人口規模に比例し距離の  $\beta$  乗に反比例すると考えると、人口規模  $P_i$  の都市  $i$  から人口規模  $P_j$  の都市  $j$  への移動人数  $I_{ij}$  を求める重力モデルは次のように定義される。

$$I_{ij} = k \frac{P_i P_j}{d_{ij}^\beta}$$

この式の  $\beta$  値を、ある県から他都道府県に流出する場合(発地)と、他都道府県からある県に流入してくる場合(着地)の 2 つの場合に分けて算出した。そして 2 つの  $\beta$  値を散布図にしたものを図 1-1 に示した。 $\beta$  値は距離の減衰率を表わしているから、大きければ大きいほど、遠方地方との人口移動があまりないことを示しており、小さいほど人口移動が広範囲に広がっていることを意味している。図では地方ごとに記号を分けているが、地方別で  $\beta$  値が同じような傾向を示していることが分かる。例えば青森県、岩手県、秋田県は発地着地  $\beta$  値どちらも大きく、近隣への流出入があり、対照的に東京都、神奈川県では発地着地  $\beta$  値が小さく、広い範囲での人口の流出入があることが見て取れた。

次に、大学についての評価だが、大学入学者データ(計 20 校)をもとに人口重心、平均移動距離(出身都道府県県庁所在地から大学までの距離の平均)ならびに、ジニ係数(都道府県別入学者数を基準)を算出し、地元志向という大学進学動向を時間的にかつ空間的に分析した。

